

令和 7 年 2 月 21 日

教 育 長 様

研究コース		代表者	校 園 名 :	大阪市立堀川小学校
B グループ研究B			校園長名 :	衣笠 博政
校園コード (代表者校園の市費コード)			電 話 :	6358-3336
511001			事務職員名 :	西 麗美
選定番号	201	申請者	校 園 名 :	大阪市立堀川小学校
			職名・名前 :	首席・流田 賢一
			電 話 :	6358-3336

令和6年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和6年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	B グループ研究B	研究年数	継続研究（2年目）												
2	研究テーマ	子ども主語への学びの転換 － 国語科の指導の系統と個別最適な学びをめざす授業のあり方 －															
3	研究目的	1. シンプルな授業づくりとなり児童主体の学びへと転換するために、指導の系統を意識した学習内容の精選 2. 児童が学びをメタ認知し、自己調整できるためのポートフォリオの開発 単元始ー学びの変遷ー単元末を一覧できる方法（デジタルとアナログ） 3. 国語科の個別最適な学びを理論研修、整理、提案、検証 個別最適な学びを実施する場面を整理、単元のどこで実施できるか実践提案 4. 子ども主語へ学びが転換することで学ぶ意欲が向上と学力の向上の相関関係を検証 5. 教材分析ー公開授業を同一教材でセット開催することで教員の指導力向上 6. 公開研究会を複数回開催し、賛同者を増やし全国に研究の輪を拡大															
4	取り組んだ研究内容	いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSゴシツク 9.5分 イント） 年間計画 4月――5月――6月――7月――8月――9月――10月――11月――12月――1月――2月――3月 教材分析 《教材分析》→→→→→→《教材分析・授業化》 公開の場 【公開】→→→→→→→→→→【公開】→【公開】 上記は年間計画のイメージ図である。以下具体的に内容を示す。 『研究企画会』4月3日、13日 今年度の研究内容を話し合う。めざす子ども像を考え「言葉にこだわり、考えに愛着をもつ子ども」とする。問いをもつ時、相手の話を聞く時に媒介となる言葉にこだわってほしい。また、考えを深めたい、聞きたいと言葉に愛着をもって学習に取り組む姿をめざす。キーワードは、「つながり」「問い」「追求」とし、指導案の中でも整理するように話し合う。 《教材分析6回》7月の公開に向けて教材分析をする。教材分析公開は、11月の公開授業と同じ教材で実施し、教材分析と授業化をセットで学べる工夫をする。教材分析には、文章構成の分析に加え、単元計画や個別最適な学びを実現する授業案まで提案できるようにする。 【公開：教材分析】7月27日 50名を超える先生方の参加がある。3教材から希望する教材に分かれ、教材分析と授業化をグループで話し合ってもら。その後、メンバーが教材分析・授業化を提案発表し、講師先生からの指導を聞く。研修の内容の充実に向けて、上記のようにプログラムを練ったことは参加者の学びにつながり満足度を高める。 《系統：複数教材8回》今年度は教科書改訂があり新教材が掲載される。身につける力(用語)を確認し、全学年を表にまとめて指導の系統を整理する。教材の関連が明らかになったところで、確実に力をつけるためにその教材にリンクした教材を考える。複数の教材を扱う単元設計を考え、紙面にまとめた。 【公開：研究授業】11月1日、11月8日 教材分析した教材を授業化した公開授業 教材分析と授業化の間には大きな壁があると言われている。分析したことをどう授業化して学びとするのか。また個別最適な学びを実現するための単元設計や本時のあり方を提案する。昨年度から取り組んでいる個別最適な学びを実現するための単元設計の効果的な流れ（協働で土台を作りー個別にゴールに向かう問いを追求ー協働でゴールに向かい整理しまとめる）にそって実践したことを公開し、研究発表する。 〔管外出張〕東京の小学校では、指導者の深い教材理解のもと子どもたちの主体的な学びのつくり方を研修から学ぶ。福岡では、今後の日本の教育を先取り実施している学びを目の当たりにし、子どもが学びたいことを学ぶ姿から問いをもつことや個別に追求すること、振り返ることの大切さを学ぶ。研究メンバーで研修内容を共有し、今までの方向性は間違っていないと確信する。 『研究の振り返り3回』学力経年調査の結果分析、アンケート分析、がんばる先生支援報告書の作成をする。児童の学習と同様、研究の振り返りを重視する。児童の学びと指導者の願いが一致しているかをアンケートやインタビューから考察する。また、経年調査などの数値から考察する。															
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。 <table><tr><td>日程</td><td>令和 6 年 11 月 8 日</td><td>参加者数</td><td>約 151 名</td></tr><tr><td>場所</td><td colspan="3">堀川小学校</td></tr><tr><td>備考</td><td colspan="3">令和6年7月27日 公開授業研究会 参加者数:約50名 場所:堀川小学校 令和6年11月1日 公開授業研究会 参加者数:約50名 場所:みどり小学校、Web記事</td></tr></table>				日程	令和 6 年 11 月 8 日	参加者数	約 151 名	場所	堀川小学校			備考	令和6年7月27日 公開授業研究会 参加者数:約50名 場所:堀川小学校 令和6年11月1日 公開授業研究会 参加者数:約50名 場所:みどり小学校、Web記事		
日程	令和 6 年 11 月 8 日	参加者数	約 151 名														
場所	堀川小学校																
備考	令和6年7月27日 公開授業研究会 参加者数:約50名 場所:堀川小学校 令和6年11月1日 公開授業研究会 参加者数:約50名 場所:みどり小学校、Web記事																

6	成果・課題	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<b>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</b>および<b>教員の資質や指導力の向上</b>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p>
		<p>【見込まれる成果１】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>ポートフォリオ作成により、児童の学びの方向性がはっきりとする。単元末には学んだ内容と次への学び方を振り返り、自らの学びをメタ認知することができる。学び方を変革することで、児童の学力が向上する。</p> <p>《検証方法》</p> <p>経年調査国語科の「基礎・活用」（学力）で大阪市平均を超える。学びを振り返り「自分には力がついた」（学力のメタ認知）「今までの学習を思い出し、活用できないかと考える」（既習の活用）と回答する児童の割合が８割以上となる。</p>
		<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>研究メンバー当該学年の経年調査の国語科大阪市比較の正答「合計」＋10.0(昨年＋9.2:以下同様)、詳しく分析すると「基礎」＋9.5(+8.0)、「活用」＋11.0(+11.9)であり昨年と同様に大幅に大阪市平均を超えた。児童アンケートの肯定割合「自分には力がついた」100%、「今までの学習を思い出し、活用できないかと考えた」89.6%と８割を超えた。国語科は系統が見えにくい教科だが「前の物語から難しくなっているね。今回は新しく気持ちの変化を考えられたらいいんだ」「前の物語と似ているところがあるね」と既習を活用し、関連付けて学習する姿が見られた。先述のアンケート結果の割合が高くなってきたところに「苦手だったけど分かるようになってきた」と学びの力が身についたことを実感する言葉が聞かれるようになった。その実感通りに経年調査では数値としても表れた。国語科では見えにくい系統を子どもたちに気づかせ、既習を活用する学びは有効であったと考える。</p>
		<p>【見込まれる成果２】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>国語科の個別最適な学びとは、共通のゴールに向かって自ら決めた方法により読み深める学びである。自ら選択・判断・追究することは、児童の意欲の向上、学ぶ力の向上につながる。受け身の学習ではなく、自ら学習するためポートフォリオを見返しながら学びを調整する姿も期待できる。子ども主語の学びは、学びの楽しさを実感することができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>経年調査国語科の「主体的に学習に取り組む態度」が大阪市平均を超える。児童アンケートの「課題解決に向けて最後まで取り組んだ」「どう学んだらいいかを考えた」「問題に出会った時に問いを持ち考えることができた」「学ぶことは楽しい」の割合が９割以上になる。</p>
		<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>研究メンバー当該学年の経年調査の国語科大阪市比較の正答「主体的に学習に取り組む態度」＋12.4(昨年＋11.6)となり、昨年度の結果も大阪市平均も大きく超えた。児童アンケート肯定割合「課題解決に向けて最後まで取り組んだ」92.6%、「どう学んだらいいかを考えた」91.2%、「問題に出会った時に問いを持ち考えることができた」96.2%、「学ぶことは楽しい」94.3%となり1学期調査より大幅に増加し９割を超えた。これは、個別最適な学びの学習形態を研究メンバーで話し合い、共通のテーマやゴールに向かって学級全体で学ぶ単元の流れを整理し、実践したこと。そこに向かう道筋(問い)は違っていてもいいと整理し、実践したこと。既習を活用し、どう学べばゴールに近づくかを問い続ける学びをめざして実践したことが、受け身で学んできた国語を変革したと考える。しかし、問いの精選、学び方の育成には課題が残る。</p>
		<p>【見込まれる成果３】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>教科の本質、教材で学ぶ本質を見極めることでシンプルな授業展開となるため、教材分析力が向上する。大学教員や先進的研究校教員から今後求められる指導について学ぶことができ、児童主体の学びへと転換することができる。理論と実践をつなげて学ぶことができるため、児童の具体的な姿をもとに研究を進めることができる。</p> <p>《検証方法》</p> <p>研究メンバーへのアンケート結果から、指導力の向上についての肯定的割合が９割以上となる。公開授業研究会では、実際の児童の学びを見てもらい参会者の満足度が８割以上となる。系統を意識した学びを提案し、「系統を意識した授業を実践している」の割合を研究会への複数回参加者の割合が向上する。このことで研究の広がりを検証する。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>研究メンバーは全員が指導力の向上を実感できた。それは、①個別最適な学びを取り入れることで児童一人ひとりの学びを丁寧に確認できたこと。②子ども主語とはいえ指導者の教材分析や単元設計は欠かせないということ。③個別最適な学びを実現するための単元設計の効果的な流れとして、協働で土台を作り-個別にゴールに向かう問いを追求-協働でゴールに向かい整理しまとめる学びの実践を重ねた。以上のことより、児童の学びが豊かになった実感をもっている。公開授業で参加者の満足度は100%であり、研究報告に上記の３点を報告すると「子どもの発言を大切にした授業だった」「教材分析があるから子どもの学びが成立していると思う」「問いから学びをつくる方法がいい」と賛同した感想をいただいた。また、「系統を意識した授業をしている」の結果は研究会1回目参加者の回答は62%、複数回参加者の回答は88%であり研究の広がりを実感できる結果となった。</p>

6	成果・課題	<p><b>【見込まれる成果4】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>国語科での個別最適な学びの実践例が少ないため、本研究会での実践例提案や研究授業での提案を参考に実践が広がる。単元のどこに個別最適な学びを位置付けるかや、児童の学びの方法を分類整理する。研究会で以上のことを提案し、参加者に個別最適な学びが広がっていく。</p> <p>《検証方法》</p> <p>教科の本質、教材で学ぶ本質をまとめたものを研究会で参加者に配付する。参加者アンケートの「自らの実践に活用したい」が8割以上となる。そして、参加者アンケートの「個別最適な学びを実践している」の割合を研究会への複数回参加者の割合が向上する。このことで研究の広がりを検証する。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>教材分析公開と公開授業研究会を関連付け、分析(理論)と学びの姿(実践)を切り離すことなく考えられる工夫をした。教材分析の段階から単元計画や本時の授業案を提示し、学習の系統や個別最適な学びを成立させる手立てを検討してきた。特に、単元計画の流れ(協働で土台を作り-個別にゴールに向かう問いを追求-協働でゴールに向かい整理しまとめる学び)が好評であり、「自らの実践に活用したい」との回答が100%であった。それは、公開授業の感想に「問いを追求する学びが意欲的に考える姿につながっている」「つぶやきが止まらず、学びたいを感じる授業だった」とあり、公開授業の学びの姿を見て実践に取り入れたいと感じたのだろう。個別最適な学びを実践していると回答した割合は、1回目の参加者は31%、複数回参加者は66%であった。倍以上の結果であるが、新しく出てきた個別最適な学びを実践に取り入れることに難しさを感じている先生がまだ多いと感じた。</p>
---	-------	---

		<p><b>【研究全体を通した成果と課題】</b> 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>○成果・読書会・理論研修を重ね、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に向けた授業デザインの提案ができた。【協働】読みの土台→【個別】問いの追究(選択可能)→【協働】学びの共有・取組の結果として、学ぶ必然性を生む問い、必要感のある協働の学びが学力向上・学ぶ意欲向上につながった。</p> <p>・教材分析と授業を同一教材で公開したことで、のべ200名以上の参加者があり、本研究内容が参加者に広がった。</p> <p>●課題・個別最適な学びの本研究グループの定義を確立し、目指す子ども像を検討し具体的な提案につなげる。</p> <p>・個別最適な学びと協働的な学びのグラデーションを年間レベル、単元レベルで整理する。</p> <p>・子どもに学びの見通しをどう持たせるか。・価値のある問いの設定、問いの深化へとつながる学びのあり</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>○成果・個別最適な学びを実現する単元の流れを研究グループ内で整理し、年間複数回実践できた。共通のゴールやテーマに向かい、問いを追求することで学び方を変革させることができた。系統を意識した学びや個別最適な学びは、主体的な学習を実現し、学力向上につながった。意欲的に学び続ける姿や振り返りから、学びを自覚化していると感じた。以上のことは調査結果の数値からも結論づけられる。のべ250名以上の参加者が私たちの研究へ賛同し、研究の広がりを実感できた。</p> <p>●課題・解明したい問いがそれぞれ違うため、ゴールへ近づく距離も変わってくる。そのため効果的な問いの設定の仕方を考えたい。また、個別最適な学びの時間は子どもが勝手に学ぶ時間ではないため、学びへの自由度と教師の指導性の関係を考えたい。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>個別最適な学びと協働的な学びは令和3年答申として示された。個別最適な学びは、まだ実践例は少ないが本グループは単元モデルを作成し提案をした。公開授業での児童の姿は、学ぶことを楽しみ、それぞれの児童が学びに向かう姿が見られた。研究1年目として学力向上や意欲向上の結果が得られたことは成果である。多くの参加者とともに研究を進められたことも研究の「ラッシュアップ」につながっている。今後求められる研究テーマに真摯に向き合い、研究を続けてきたことについてまとめることができた。研究に取り組む熱意を強く感じた研究であった。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>まさに「つながり」を追求した1年だったのではないだろうか。既習教材と学習教材のつながりを意識した学びを展開する。学習のゴールやテーマと自分の追求したいことをつなげて主体的な学びへと誘う。個別最適な学びだけを考えるのではなく、協働的な学びをつなげて実践する。個別で考えた問いを全体の中でつなげて学級の学びとする。研究へ参加する他校の先生とのつながりを大切に、共に学び合う。今後、学びを実感した子どもは自走するだろう。自走するためにはまだ研究を続け、さらなるつながりを児童・指導者・仲間と広げ、深化していく必要がある。これからの研究がますます楽しみである。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>
--	--	---